

第1回上級コーチ講習会報告

体協と加盟競技団体とが一致協力して指導者育成の第一歩とした「第1回上級コーチ講習会」が2月23日から27日まで世田谷区下馬にある三井生命教員所と目黒区碑文谷の第一

勧銀体育館を使用して行われた。参加者は予定の50名の内、41名が参加。4泊5日にわたる熱心な講習会だった。そこで、その内容を主催者側から日本協会理事、日高明氏に、受講

者側から小林平八氏（中京大監督）に依頼し、その主旨と主な受講後の感想などを書いていただいた。

以下はその内容である。

協会一体になったの強化策

日本バスケットボール協会理事 日高明

「第一回上級コーチ講習会」を開催するにあたって、その前提となる「日本体育協会公認スポーツ指導者制度」の制定についてご理解をいた

だくために少し述べてみたいと思います。

かねてから懸案となっていた指導者の育成と活動促進について、日本

体協ならびに加盟団体が一致して市民スポーツ層の指導から、トップの選手層の指導に至るまで、地域的にまた競技種目別にも相互の関係を密にして指導体制の確立を目的に推進することになったのが、そもそもの発端です。これまで学校運動部を主な基盤に競技スポーツとして発展してきた我が国のスポーツ界は、広く市民スポーツ層からトップの選手層までに対応する受け入れ態勢ならびに指導体制が充分整備されているとはいえません。また、モントリオール・オリンピック大会を反省した各競技団体は、コーチ制度や指導体制の確立している国が好成績をあげている事態を指摘し、我が国の不備を認めていました。これらの実情をふまえて、地域における楽しみに行なう市民スポーツ層から、発育期の将来性ある少年層のスポーツ、そして世界に挑戦するトップ・クラスの選手層まで、これまで各競技団体が永年培ってきたスポーツ技術を科学的に裏づけられた一貫した指導方針に基づき、対象者の活動目的に適應できる指導体制を早急に確立する必要があります。我がバスケットボール協会も、かねてから、その必要性を痛感し、普及部、選手強化部が中心になって、この企画を進めることにしたわけです。

さらに、この制度を制定する目的について、こう述べています。

I 指導体制確立の目的

1) 各スポーツの特殊性に対応した指導体制を確立する。(それぞれの

〈第1回上級コーチ講習会・受講対象者名〉

〔実 連〕
 諸山 文彦 (日本鋼管)
 樋口 隆之 (日本鋳業)
 小宮 宗勝 (住友金属)
 藤原 徹 (松下電器)
 江川 嘉孝 (新日鉄)
 安達 宣郎 (三井生命)
 日森 共 (東 芝)
 尾崎 正敏 (ユニチカ山崎)
 從野 明宏 (第一勧銀)
 浅野 義尋 (三菱電機)
 榎本日出夫 (日立戸塚)
 島立登志和 (日立甲府)
 中村 和雄 (共同石油)
 奥谷 忍 (三井生命)

新井 春生 (市邨短大)
 堀本 宏 (中京女大)

〔高体連〕
 津田 洋道 (北 陸 高)
 荒井 強平 (岐阜農林)
 小野 宏道 (高松 商)
 佐藤 豊 (土浦日大)
 田中 国明 (福大大濠)
 堀川 康人 (大 曲)
 張替 信 (大 妻)
 西塚 建雄 (昭和学院)
 松本 和郎 (夙川学院)
 川田 隆一 (鹿 児 女)

〔日本協会推薦〕
 笠原 成元 (学習院大)
 吉田 正彦 (日本鋼管)
 嶋田 出雲 (大市大)
 原田 茂 (樟 蔭 東)
 浮田 剛 (相工大附)
 小浦 重穂 (東 芝)
 小浜 元孝 (法 大)
 森下 義仁 (拓 大)
 関 範彰 (法 大)
 石川 俊紀 (京 産 大)

※50名の内、41名が参加。

〔学 連〕
 武井 光彦 (東 教 大)
 清水 義明 (日 体 大)
 畑中 悌二 (明 大)
 細島 繁 (日 大)
 浜中 貞一 (慶 大)
 鎌田 正司 (早 大)
 小林 平八 (中 京 大)
 島田 三郎 (大 商 大)
 石川 武 (日 体 大)
 鯛谷 隆 (東女体大)
 手島 昇 (日女体大)
 佐々木克明 (武庫川大)
 細川 盤 (大 体 大)

スポーツ特性や競技団体の実情に即した指導方針の一貫化をはかる)

2) 多様なスポーツ活動に対応する指導者の養成を制度化して行なう。(基準となる制度を設定し、段階を追って資質や指導力の向上をはかる。)

3) 指導者の各組織内における位置づけと、指導技能や指導能力に応じた資格認定を明確にし、社会的信頼を確保する。(国民のスポーツ欲求に対する体協の社会的使命を認識し、社会の要請に対処できる指導体制を整備する。)

4) 競技種目および地域における指導者の組織的関係をすすめて、活動促進をはかる。(市民スポーツ層に係わる指導者から競技力向上に係わる指導者まで一体となって、地域や競技単位に組織化をすすめて、指導者相互の関係を緊密にする。)

5) 上記目的を実現させるため、現行のスポーツ指導員、スポーツ・トレーナーの育成事業は発展的に本制度に組み入れ、計画的に育成をはかることとする。

II 指導者の種類と役割

スポーツ技術の指導者の育成と活動促進を中心に、次の3種になっています。

1) インストラクター(Instructor)

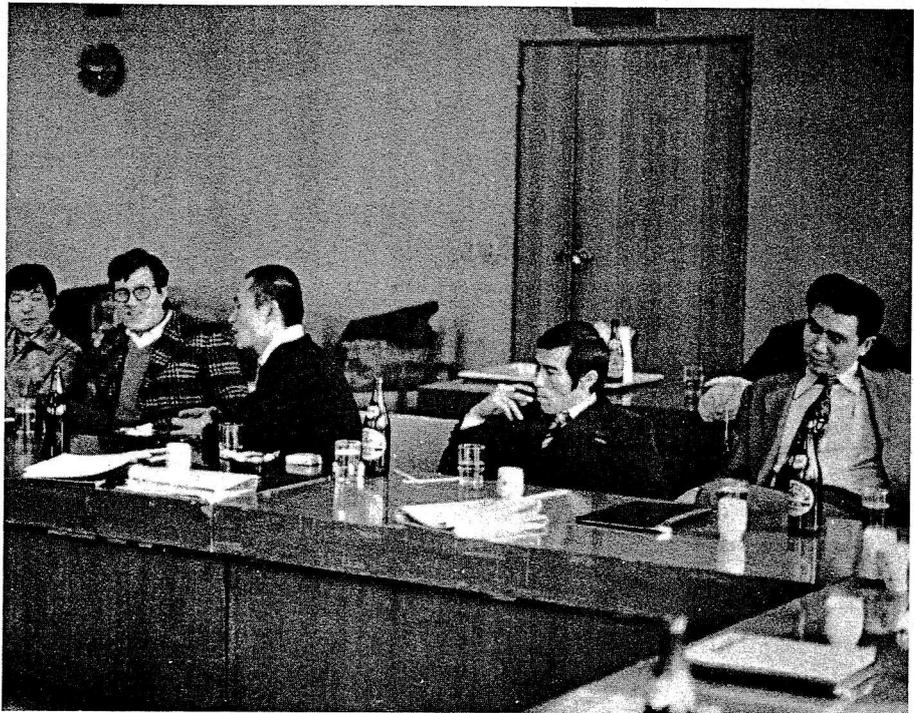
スポーツ活動を行なうグループやクラブにおいて、スポーツ技術の指導と活動組織の育成・指導にあたる者。

指導対象者の性、年齢、経験、運動能力に対応する基礎的な知識と指導技能を身につけ、一応の指導経験を有する者。

2) コーチ (Coach)

スポーツ活動を行なうグループやクラブにおいて、スポーツ技術の指導と活動組織の育成・指導にあたる者。

指導対象者の性、年齢、経験、運動能力に対応する専門的な知識と指導技能を身につけ、相当の指導経験を有する者。



閉講式でも終始なごやかな雰囲気だった。

3) 上級コーチ (Senior Coach)

スポーツ活動を行なうグループやクラブにおいて、スポーツ技術の指導とインストラクター等の育成にあたる者とともに、新たな技術の研究開発を行なう者。

指導対象者の性、年齢、経験、運動能力および当該スポーツの特殊性に対応する専門的な知識と指導技能を身につけ、相当の競技経験と指導経験を有する者。

III 指導者の育成

前項のスポーツ指導者を育成するため、共通教科と専門教科から編成されたカリキュラムに基づき次の講習を実施します。なお、教科カリキュラムは共通教科を日本体育協会が専門教科は各競技団体が担当し編成する。

- 1) インストラクター育成コース。
講習は都道府県体協と競技団体が担当する。
- 2) コーチ育成コース
- 3) 上級コーチ育成コース
講習は体協と競技団体が担当する。

IV 指導者の登録

前項の資格を得たスポーツ指導者

は日本体育協会、ならびに各競技団体へ登録を行ない、登録した指導者は日本体育協会ならびに各競技団体が実施する行事・事業への参加や各種の助成を受けることができます。

さらに、この制度が確立されると日本を代表するナショナル・チームのヘッド・コーチやその他のスタッフを有資格者から選出することになっています。

日本体育協会発行
(指導者のためのスポーツ・ジャーナルより抜粋)

以上がこの制度の概要ですが、日本バスケットボール協会では、

1. 指導者の強化と或る程度の意志の疎通
2. 高校→大学→実業団におよぶ一連の指導体系の摸索
3. インストラクター、コーチ育成のための指導者を養成する。

ことをさらにつけ加えて実施しました。

講習会の経過

日本体協から50名の受講生をということで、実連15名、学連15名、高体連10名、強化委員会推薦10名の計50名の参加者を推薦していただいたのですが、公務やその他の事情から

結局41名の参加で始めました。日程・内容は別表の通りですが、三井生命と第一勧銀の御厚意により、宿舍と体育館を提供していただきました。

講習会は、講義・実技指導・セミナーにわかれ、最終日の午後はテストというきびしいものでした。

連日、午前8時に朝食、8時半宿舍出発、9時開始、午前は11時50分まで、昼食休憩が1時間、午後1時再開、午後4時40分終了。宿舍に帰り夕食、午後6時から8時40分迄、講義及びセミナー、1日10時間をこなすというハードスケジュールでした。

講師の説明に対する質問、意見が活発にだされ、テーマによっては、火花が散るような激しい応対もしばしばありました。一日の終了後、さらに、各部屋に数名が集まり、深夜2時、3時におよぶバスケット談議がつづき、まさにバスケット狂の集合体といった感じで、その熱心さは、さすが日本のトップ・レベルのコーチ達だなあと感心しました。

紙数の関係で内容に関する報告ができないのが残念ですが、私がノートした分だけでも約40頁になるほどです。ので想像していただけたと思います。

成果と反省

参加者個人によって、感じ方が異なるかもしれませんが、主催者側としては、予期以上の成果が得られたものと考えています。年度末をひかえた多忙な時期に集っていただき、その上、前述のようなハードスケジュールに耐え、ともすると独善的なバスケットボールに対する考え方、取り組み方を第三者に公開することによって、さらに自己の向上に役立っているという気持ちがなければ、とうていこの講習会は成功しなかったでしょう。主催者側としては、最初は、トップ・レベルの人達はなかなか参加しないのではないだろうか、半分も集まれば成功ではないかと、いささか危惧の念を持っていましたが、予定した、ほとんどの顔ぶれが集まり、皆さん方の熱意の程が伺われ、

講習内容

	2月23日	2月24日	2月25日	2月26日	2月27日
9:00		〔指導法〕 ゾーン・オフ ンス(原田茂)	〔指導法〕 基礎技術 (清水義明)	〔指導法〕 オフ ンス(新井春生)	指導法に関する セミナー (吉井四郎)
12:00		質疑応答、討論	質疑応答、討論	質疑応答、討論	
13:00	受付、開講式	昼食	昼食	昼食	昼食
17:00	のぞましい指導 者(吉井四郎)	〔指導法〕 オフ ンス 速攻法 (榎本日出夫)	〔指導法〕 ディフェ ンス 忍者ディフェ ンス(尾崎正敏)	〔指導法〕 ディフェ ンス 2-2-1ゾ ン・プレ ス(吉田正彦)	テスト 閉講式、解散
18:00	女子の指導 (尾崎正敏)	技術の発達段階 (吉井四郎)	質疑応答、討論	質疑応答、討論	質疑応答、討論
21:00	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食
	世界のバスケット ボール 男子(吉田正彦)	技術に関する セミナー (牧山圭彦)	競技規則及び 審判法 (藤堂臣令)	〔戦術と作戦〕 ゲームの実態と 把握(吉井四郎)	ゲームの指導 (尾崎)
	女子(尾崎正敏)	(吉井四郎)			

日本バスケットボール界の向上、発展に必ず役立つことと、大変喜ばしく感じています。

反面、主催者側としての反省もないわけではありません。

1. 年度内に終らせるという時間的な制約のために、多忙な時期を選ばざるを得なかった。
2. 専門教科40時間を消化するためには、もう少し日程が欲しかったが、4泊5日のため、1日10時間以上の強行スケジュールになったこと。
3. テーマが広汎な範囲に及んだために、問題点を深く追求する時間が不足したこと。

等があげられ、次回からの参考に資したいと考えております。

最終日のテスト終了後、関西地区の参加者からの発言で、第一期生の集まりを、今後、年に一回以上は持つて、お互の研鑽を深めていこうということになり、尾崎、細川、島田(三)の諸氏が幹事役になり、関西地区ですでに実施されている“がんばろう会”に合流する決議がなされました。自分達が、日本バスケットボール界発展のための技術指導面での礎石になろうという決意の程のあらわれだと思っています。

今後の指導者強化態勢について

底辺の拡大、競技人口の増加、そのことがやがては、世界の檜舞台での好成績につながることは論をまたないところですが、そのためには、良い指導者が絶対に必要です。従来

からもその必要性について種々検討され、手はうたれてきたのですが、隔靴搔痒の感がないでもなかったというのが本音です。

日本協会が総力をあげて、このことに当るのは勿論ですが、従来、ともすると、普及・強化・規則審判、それぞれの横の連絡がとれないために、その実があがらなかったこともあり。また、ミニバスケット、中学校、高校、大学、実業団とつながる縦の糸も必ずしも太く丈夫なものでなかったのが実情であったと思います。今回の講習会で、縦・横の連繋がある程度とれはじめたことは画期的なことと言えるでしょう。

協会としても、今後事情のゆるす限り、上級コーチを育てる講習会を開催し、世に送り出すと同時に、都道府県単位のコーチ・インストラクター育成講習会も開いて、次代を担う指導者を養成しなければならないと考えております。

今回の講習会参加者のレポートをまだ全部読んで居りませんので、何とも言えませんが、各人から出された良いアイデアをどんどん生かしていきたいと考えています。

終りにのぞみ、講習会成功のために、陰の力になって下さった、日体大男子バスケットボール部員、日立戸塚の部員、学連の小武、本永の諸氏に厚く御礼を申し上げる次第です。

3月5日記

(文責・日高 明)

コーチングのオアシス

—第1回上級コーチ講習会に参加して—

中京大学監督 小林平八

参加

名古屋を出発した2月23日は、新幹線が全国的に午前中点検整備のため全線全面運休であり、三井生命での点呼(午後12時30分)に間に合わせるべく午前5時には家を出た。

途中参加するにあたって希望と不安が入り混り、どことなく半信半疑な面も多分に感覚的にはあった。この催しとしては、以前1級・2級トレーナーの養成とか中央指導者技術講習会などの催しはあるにはあったが、今回のような規模での講習会をもったことは恐らく初めてのことで、一抹の不安もつゆ、一体、「誰が激動の第一線で活躍しているこのいわゆる上級コーチを、どのようにして講義するのか」「選出された参加者は、どのような顔ぶれか。」「送付されて来た講習会の内容の最後にテストがあると書き込んであったが、どのような問題を誰が採点するのか」等が正直いって、早朝の車中で頭の中をかすめていた。

だが、その半信半疑の不安な存在も講習会が始まった途端、いつの間にか消え去り吹き飛んでしまった。参加した講師と受講者の顔ぶれが初めて一堂に集結した頃には、私が最初に懸念していたことを皆同様に思っただけで済んだのだと言うことが、読みとれた。講義が開始されるといつの間にか、そんな雰囲気はたちまち忘れ去り、真剣味あふれた熱気の

ある雰囲気につつまれた。

この講習会の意図も完全に理解された。ここに集合した集団はお互いに、過去何回となく選手権のかかった大会で戦ったことがある人や、また、そうした関係はなくてもほとんどの人は顔見知りであり、よく相手を理解している者同志であった。そのために各自が互いに、ただ者ではないぞと姿勢を正し、当然自分に対しても、気合を入れ真剣にならざるを得ない心構えとなったのだ。

場内はややもすれば、ゲーム中のベンチに座っているときの雰囲気にもなりかねない。なぜなら、参加者全員が「日本バスケット界の夜明け」となる画期的なことが始まることであることを察したからである。各自それぞれがチームの最高責任者である以上、一挙手一動作に責任をもった態度で望まなければならないという態度が、暗黙のうちに広がっていくのを確認し合った。

講師はなんとかして日頃苦悩しているコーチの受講者全員に、おのれがこの足で歩み、遠回りしてやっとの思いでつかみ取った道を少しでも短縮できるのではなかろうかとの暖かい心づかいがにじみ出ている。体験を通じて得たものを伝達して、それを組み合わせたり、結びつけたり、たたき台にしたり、さらには各自のオリジナルなものを創り出すきっかけになればとの心づかいが感じとれた。

日頃受講者は、まったく孤独の中で壁にぶつかって苦悩しており、この講習会の中から何とかして今迄になかった何かを吸収し、活路を見つけてだし脱皮したい心が、各自の目に

写っていた。

両者ががっぷり、拍車をかけてぶつかり合い、やる気満々となって講習会の幕は切って落とされた。

講師 上級コーチをする人

悪たれ言葉で表現するならば、なんとかして他人の良さを「盗もう」というまなざしで受講する各コーチを前にして、講義する講師も人の子である。発表は、現在我が国で最も活躍中の現役コーチばかりであり、最前線のコーチである。極秘作戦を出し惜しみでもしたネタを受講者に提供でもしようものなら、普段、相手に対する読みを鋭く研究し、超能力を持ち合わせている受講者にはすぐに見破られてしまうので、全力投球をせざるを得ない。正真に出せば出したで、相手は常に対戦する仲間だし、明日は敵になる。自分の苦勞に苦勞を重ねて編み出し、創り上げた^秘の情報をみすみすあっさりとして相手に提供し、しかも吸収されてしまう。相手からは、なんにも見返りがない！神様でないかぎり人間、誰しもこんなとき、複雑な気持となることはいままでもない。こんな損な役割を実行した講師のI氏は、全員、疲れがピークとなった第4日目に行った講義開始の第一声で、並いる全員の現役コーチに、心に大きく響く言葉を与えてくれた。

『皆さん、これから私は皆さんに私が苦しみ、もがき、やっとの思いで

見つけ出し、創り出し、今まで秘蔵にしていた私にとって大事な宝物をお見せするわけですが、恐らくこれを皆さんの前に出しきってしまうと、私の腹の中はその瞬間にカラッポになってしまうでしょう。このことを、これから実行するには私にとっては、最大の“勇気がある”のです。これからしゃべることによって、私はあえて全身が空洞になり、穴だらけになることを覚悟しています。

発表後はすぐにまた、必死の思いで新しい技術を開拓しなければなりません。初めて手にしたときのように、また明日から一步一步努力し、空腹を満たすのだという心境で、お話しします。』と言って、講義に導入していった。

I氏にとっては、決して、もったいぶった言い方をしたのではない。コーチの体験者ならば誰しもこの言葉は身に覚えのあることだし、『上級コーチをコーチする人』の誠意をもって最善を尽くそうとする姿がこのとき見られ、疲れきっていた後半の受講者にI氏のこの純粋な筋金入りの心を見出すことができ、皆大いに感銘した。

コーチのオアシス

一夜のミーティング

今回、ハードスケジュールの中でこの講習会を支えた最も価値のある

時間であった。

昨日の敵は今日の友、今日の友は明日の敵。こんな相對する人間関係にいたるもの同志が、同じ屋根の下で4泊5日も暮らすことが、うまくできるのだろうか。別表に示す通りのハードなスケジュールでの生活で、唯一の楽しみは朝食、夕食、夜食を食うことと、風呂に入ることである。全く、食うことと、寝ることの人間本来の原点が唯一の楽しみである。夕食後も、6時から9時の講義があり、終わると、1時間後の10時の門限まで全く休む時間がない。さすがに疲れはひどく、集中力は鈍り、思考力は時としてなくなり、くたくただ。

だが、最後の講義が終了し各自部屋（同室2人）に戻り、1日も終わりにやれやれと顔を見合せたとたん、ムラッ！ムラッ！とファイトの泉がわき起こる。まだまだ何か講義にも足りなさがあるのか、何しろもっと、バスケの話がしたいのだ。

そこにはもう、体系だったバスケットボール論はなくてもいい。むしろ、肌で感じる実戦論が心置きなくフランクに、飛び出すのだ。

私は、「厳しい勝負の世界に互いに生きる者同志が、この世で生存中に友達になれる方法はあるのだろうか」と、かねがね思っていた。今回の体

験から、いとも簡単に答が出た。それは、「同席して共にめしを食うことが、必ず仲よしになれるということが実感として受けとめられた。この時間こそバスケットボールの宝探しの時間であり、宝物がうようよしている。

厳しい世界に相對する者同志が心を開いて話しをするということが、進歩のためにいかに必要であるかが各自、身にしみて解ったことと思う。いくら話題が豊富で突込みの効いた講義であっても、何かもう1つ突込み不足の部分に、このときこそ触れることができ、置き忘れられていた数々の話題が集中してくる。

特に、各自の体験からにじみ出た真底の独創性のあるコーチング論がこうした雰囲気の中から次から次へと、和気あいあいの内に進み、時のたつのも忘れ、気がついたら東の空には、すでに明るさがただよっていた日もあった。

なぜ、この時間にこそ持参してきた録音テープを記録としてとっておかなかったかと、悔んでならなかった人も多数いたはず

コーチという体験をした人でなければ、「絶対」が、つくほど、この道のことは、理解でき得ない。コーチを生きがいとしたと言う、特殊な数少ない仲間が、1年に1度あるかもしれない、こうした集まりの場が、今までになぜもっと早く提供され、こうした理解のもとで集まり得なかったものか、残念でたまらない思いがする。人間誰しも孤独、そのなかでも最も孤独な人と言っても過言でない「コーチ」が、こうしたかたちで、しかも最初はきぜんたる態度で接しながらも、いつしか我を忘れて、連日夜遅くまで人間性に触れ、語り合えたことに、この上級コーチの真の意味での収穫があったのではなからうか。

人間心の開閉差こそ、その人の行動に対しての今後における成否のカギが、左右されると思われてならなかった。



指導の実際 尾崎氏（女子モン トリアール監督）が男子チーム ・日体大に忍者ディフェンスを 指導

とかく、巷（ちまた）では、やれ女子のコーチだから、男子のコーチだから、ああだ、こうだと指導することに、男女の優劣差など口に出して言う者もある。

当日、モデルとなって参加した日体大の男子学生は、レギュラー・メンバーであった。何しろ、シーズンオフでもあり、なかには、スキー実習が終って直接、山からそのまま降りて、練習コートに合流した者もいた。

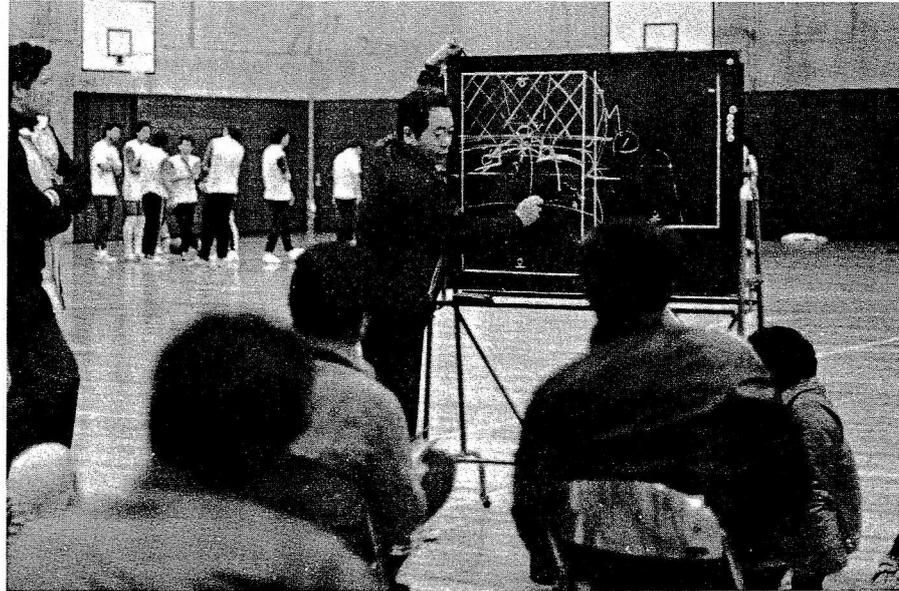
こんなコンディションのもとでは、ほとんどの者が身体がなまっており、シーズン中のように、思うように身体がついていけない部分も見られたが、尾崎コーチの厳しい迫力のある声がコート全体に飛びかうと、最初のランニング・ドリル開始後、1分～3分位の間に、独特の「コーチ術」に、学生たちは深くのめり込んでいった。

最近では、日体大の学生は、女子のコーチに指導された体験はほとんどない。尾崎氏自身も、こうした日本のハイ・レベルにある男子を近年指導したことは、恐らく皆無であったろう。

今日の練習は、徐々に消化されていった。時間がたつにつれて、日体大選手のペースはぐんぐんと盛り上がり、シーズン中の絶好調時を思わせる場面も見られたほど活気に満ちたものであった。

日体大の選手に限らず、たとえ中学生をモデルに、この日の練習を行ったとしても、今日のような練習の成果ができたろうと、講習会の終わったあと、会場のあちこちでうなづき合っていた。

コーチはどのような相手に対してでも、自分が信じ得る練習方法は、



魂の入っているものであり、ましてや男女差など根本的には全く関係なく、指導するにあたっては、たった今、初めて出会った個々の選手やチームをも動かすことのでき得るものである。

尾崎氏は、本日こうした関係にあるモデルを、毎日接して指導しているチームと何ら変わることなく、身をもって指導でき得ることを実証してくれた。

要は、ねらいをハッキリとさせた上で、何をどのような順序で至達の実域に実現させるかを、言葉などには特に工夫を重ねて指導することが必要となる。いかにして上手に、しかも複雑難解なプレーも整理して、解りやすいように簡単明瞭に、自分の言いたいことを選手に伝達するか、その表現力がコーチには特に要求される。

コーチングへの志向 強化技術 の開拓はベンチャーである

流動していくゲームの中で、動作がより速く、より強く、より正確に行えたかによって、勝敗の優劣は決まる。

変化する場での的確な対処は、豊富な知性を身にまわっていないとできない。幼稚な失敗は、貧しい知性を植えつけ、競技の優劣は知の能力差と言っても過言ではない。瞬間的に複雑、難解な問題が次から次へ

と待ち受けている競り合いの中では、正確な判断を伴うプレーが要求される。ゲーム展開における予想能力や切り替えの早さは、高度な技術と専門能力を伴ってピンチをチャンスに切り替え、活路を見出してゆくのである。

競技力は技術、体力、精神力、経験が大きな要素となっている。これらの要因をさらに高度化し、おし進めていくにはコーチのリーダーシップの能力差が大きくものを言う。

トレーニングの実際にも、その目標に向かって冒険的な施策を施した上で、試行錯誤を続けて前進していくのである。開発能力が鈍ると、たちまち勝負の世界では、蹴落とされるはめになり指導者の能力の有無は、この開発能力にかかっている。勝つためには、常に現状の競技力を把握してチームが一体となり、あらゆる知恵をしばった上で創意・工夫し、創造に向かっての努力体制を作ることが必要となる。コーチは選手に対しては教師以上の影響力を持っている。コーチが尊敬されればされるほど以心伝心で、コーチの一挙手一動作が敏感に選手の動向に深く左右されていくので、全知全能力をふりしぼって的確な新技術、新指導法の開発に努力しなければならない。

新技術の開発は、新技術が実戦で使えるために、競技性に対する先見性に目を向け、一抹の可能性を見出し、失敗を恐れることなく根気よくおし進めていかなければならない。